

④ 傾山（一六〇五米）、祖母山（七五八米）

参照年表

年号	西曆	できごと
神護景雲元	七六八	佐伯有弥久良啓豊後守に仕せらる
延暦三	七八四	海部公常山外從五位と成る
建久九	一一九八	初代大友能直豊後国に入る
弘安四	一一八一	弘安の役豊後の將士元軍と戦う
〃	一二八五	豊後国岡田郡と幕府に提出 佐伯政直の名が書かれている
大永四	一五二四	佐伯惟治龍護寺を再建す
大永七	一五二七	大友第十代義盛の命により日野長景母牟礼城を攻撃、佐伯惟治日州辰高知に自刃、千代鶴西野にて自殺す
天正一四	一五八六	佐伯惟定薩軍と破る（整田合戦）
文祿二	一五九三	大友家統除国、佐伯惟定伊豫へ走る
慶長六	一六〇一	毛利高政佐伯に移封する
明治二	一八六九	毛利高謙版籍奉還
〃	一八九三	岡本田独歩佐伯へ赴任、大水害 鹿狩り
〃	一八九五	独歩「豊後の国佐伯」発表
昭和二八	一九五三	十三重塔県指定重要文化財となる

(終)

〔前号正誤〕 編集者の迂闊から第六十九号三十一ページ上段に、次よりなミスがありました。お詫言申し、御訂正をお願いいたします。

毛利家の法要——に因する記事で、一行目毛利千代を孫とあるのは、千代子孫、五七行、二代高謙公とある日、千代がばばんとす。まことに失礼でありました。

踏査記

一石神峠を越して三川内へ
——佐伯惟治公日向落ちの道とたどる——

高木 善吉

昨年七月標記の踏破を計画して、峠まで達したが、下の途中のかけ崩れのため行手を中止されて、三川内に入る。この出来事について、

しかし是非決行したいと思つて、去る十一月八日再び行と起して、今回足障なく踏破した。以下概要を記して御参考にしてほしい。

一行は深矢勘蔵、岩田正城、岩田善市の堅田谷の三会員と、運搬員長男を加えた五人であった。

峠で車から下りて展望する。青山側、三川内側それぞれよい眺めである。此の峠を古来幾多の兵馬が通過したこと、は前回考察した通りである。前回は昭和十四年七月二十日、その踏査記が五十五号一頁にのべている（巻末参照）。

再び見る馬場の尾は指呼の間にある。惟治主従が難渡した大永の昔が憶ばれる。道が悪くて、峠が下りつくと、車は難行を続けた。

深矢会員から旧道の位置を聞きながら、最初が部落本日と通過する。浮世離れた静かなたすまいである。それから洞部落と続くが、ここまで来るとだいぶ入里らしくなる。大永の昔にもこのあたり、わびしい賤家があつたのであろう。

大井、梅水と三川内の中心に入る。惟治主従はこの辺まで来て引返し、水口から明石峠を越えて大市尾に出たのであろうとは、すでに考察した通りである。

梅水の鶴野尾神社は古きようど秋祭で、社頭には鶴野尾神社と大書したの板子がはなをきき、子供達は売店に群れて紙弾に興じていた。参詣し、神輿の前は賑わい、参詣者

いかげぬ佐伯史談会員の参詣に、惟治の靈も喜んだことであらう。

之で私の目的は一応達成したのであるが、三会員ともまだ尾高知廟に行っていないとのことなので、廟をめぐりて車を進める。佛越から左折して、歌糸、イヤザメを過ぎ、古江境の峠に達する。去る九月二十日の探訪に、雨のために行けなかつたコースをたどることにする。古江側と三川内側の分水嶺に沿って大体北行することになる。古江、島の南を眼下に、日向灘を遠望する眺めはなかなかのものである。

道は文字通りの山径で通る人も少ないのであらう。時々とだえたりするが、草野で見通しがよいので迷うことはない。進む程に蘆海も深島が視界に入つて眼を楽しませる。イヤザメで、赤い馬居に達すれば尾高知廟は近いと聞いて来たが、山径は上つたり下つたりを繰返して、馬居はなかなか視界に入らない。しかし急ぐこともない。右手の海景色や、左手の三川内の山々を眺めながら、右手の歩を進める。うららかな小春日和に、汗ばんだ傾小丘の腰をめぐると、忽然として前方に馬居があるわれる。

馬居は分水嶺上にあつた。左手に谷沿いに下ること三町余りて尾高知廟に到達する。私は四十二年の八月に、古藤田さんとイヤザメから参詣して、再来期し難いと告げりを惜しんだのであつたが、再び訪れて感無量であつた。他の三氏もそれぞれ悲運の柵竿礼城主惟治を思つて感概にふけられたことであらう。

廟を辞して引返して馬居に達し、眺望絶佳の一劃に腰をおろして、したためた晝食の味は又格別であつた。かくて古江峠に引返したわけであるが、峠から尾高知への道は思ひの外遠かつた。一里ばかりありそうであ

ある。峠と下つて佛越から左折して葛葉に出で、国道十号線と走つて帰着したのは午後三時半、惟治の足跡を尋ねた旅を終えて、快い疲れと滋養の一服でいやした。

今回の探訪で痛感したことは、北浦村当局が尾高知廟の文化財としての価値を今少し高く評価して、イヤザメから尾高知に入る入口、峠から山径に入る所、馬居から下る所等に案内板を立てたらということであつた。一つには惟治を顕彰し、二つには村の観光開発に多大な利益をもたらし、三つには訪れる人を迷うことなく廟に導くであらうと思ふわけである。

〔余白寸言〕

歴史は夜つくられる」という言葉がある。私は、私たちが身のまわりで、今、次々につくられていくと言いたい。記録して残したい。 編集子

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

佐伯豊南高等学校教諭 同校郷土部クラブ顧問

本会 会員 市野 瀬

仁

第二章 佐 伯 港 (つづき)

五、海上輸送の特色及び問題点と佐伯港